

No.	研究テーマ	所属/役職/氏名	研究概要	関係部署
1	地域との協働による長野川の再生に関する実践的研究（フェーズ1：長野川の魅力と課題の抽出のための実態調査）	九州大学 工学研究院 環境社会部門 准教授 林 博徳	長野川の現時点の状況を把握し、地域が一体となった河川の再生に向けた研究・調査を行う。 生物調査：長野川流域に生息する魚類を中心とした網羅的な生物調査を実施する。分布する主要な生物情報を集約し、その結果をまとめ、地域住民や河川管理者等と共有。さらに、長野川の抱える環境的課題について考察し、解決策について地域住民や河川管理者と協議する下地を作る。 地域小学校・保育園等の環境学習：沿川の小学校・保育園等の児童を対象とした環境学習教室を開催し、川の魅力や課題について共有する。今年度中にまとめ、次年度以降に地域として在るべき河川のビジョン（長野川夢プラン）を議論する場を創出する下地を作る。	生活環境課
2	糸島市の観光入込における小規模飲食業等の創業及び定住要因と市内経済発展への影響に関する調査研究	九州大学 比較社会文化研究院 准教授 阿部 康久	観光入込客数の増加は「見て帰る」だけでなく、地域内にしっかり「消費を取り込む」飲食店、飲食料品製造・販売業などの存在に目を向ける必要がある。地域経済の持続的発展において、これらの新たな立地やこれまでなかった業態・活動といったイノベーションが連続的に起こることも重要である。 沿岸部や中山間地域に立地している飲食店、ランチを提供する宿泊施設、牡蠣小屋、パン・菓子製造販売といった市内全体に広がるイノベティブな人材の集積が目立ってきた。事業主や企業ではなく「人」の動機や性格に着目し、訪問ヒアリングにより糸島市を選んだ理由や定住後に感じる特性を抽出する。 抽出要件をさらに定量的に検討するため、アンケート調査によって、以前から立地する、または中心市街地に立地する事業主との特徴比較を行うなど、移住、創業、その後の定住要因を明らかにする。	商工観光課
3	糸島市沿岸域における磯焼け※の現状と対策に関する研究	九州大学 浅海底フロンティア研究センター 教授 菅 浩伸	磯焼け問題が顕著な姫島南西部の自然条件を高解像度海底地形計測装置等を用いて把握する。エリアや代表測線を選出し、沿岸から沖合に向かって潜水作業により水深、水温、底質、地形を測定する。また、藻類の生育状況を記録し、データを蓄積する。さらに、測定地点における海中景観や生息生物についても写真や動画で映像記録を取得する。 調査内容をもとに、姫島沿岸域の代表断面図と海藻の分布の模式化、及び海底地形図（水中MAP）を作成。作成した海底地形図をもとに、姫島をはじめ、同様の課題をもつ市内沿岸域（岐志、船越、芥屋、野北、福吉等）の漁業者や住民にヒアリングを行い、磯焼けの現状や過去との比較等について共有化する。 磯焼けが起こる原因については、海水温の上昇や、濁水流入、藻食生物の増加の生態系変化、海底ごみといった海洋環境の悪化が考えられている。内容を踏まえ、市民を巻き込みながら実質的に取り組める解決策（案）を検討する。	農林水産課
4	早期分解性陸上植物を用いたインスタント藻場の生態機能評価	九州大学 大学院農学研究院・ 准教授 栗田 喜久	当研究では、草刈りなどの対象となる雑草を利用し簡易的な代替藻場を作成、磯焼けした海域に重りをつけて設置することで、磯焼けで消失した藻場の機能を補償し、水産資源の増殖を目指す。 研究期間中に50㎡ほどの人工藻場を作成し、糸島市沿岸に設置後、数ヶ月程度藻場を利用する魚類等の生物モニタリングを実施する。沈めた藻場は2ヶ月程度で分解され、有機物として海底に沈殿し、小型甲殻類や二枚貝の餌となる。すでに各地で取り組まれる間伐材などを利用した木材漁礁に比べると、作成・設置が安価かつ容易であり、数ヶ月程度の短期間で無くなる点はヒジキやワカメ、アカモクなどの天然の藻場と同じであり、流失し海洋ゴミ化した際の被害も極めて小さい、という利点がある。	農林水産課

※磯焼け・・・海藻が繁茂し藻場を形成している沿岸海域で、海藻が著しく減少・消失し、海藻が繁茂しなくなる現象を指す。 それに伴いアワビやサザエ等の生物が減少し、漁業に大きな打撃を与えている。